

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかと言うと、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひとおりではない。旧記によると、A 仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて、カエリみる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという習慣さえできた。そこで、「日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは、足踏みをしないうことになってしまったのである。」

B その代わりまたからすがどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、そのからすが何羽となく輪を描いて、高い鷓尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついでみに来るのである。——もつとも今日は、C コクゲンが遅いせい、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗ざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを、ナカめていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、C 当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる。気色がない。そこで、下人は、何をおいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

問一 二重傍線部 a と d を、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。(3点×4) 知

問二 波線部 1・2 の意味を、それぞれ簡潔に書け。(6点×2) 知

問三 傍線部 A からは、どのようなことがうかがえるか。(10点) 思

問四 傍線部 B は、何を指しているか。最も適当なものを、次から選べ。(6点) 思

ア 羅生門が誰の目から見ても立派であること。 イ 狐狸や盗人がたくさん羅生門に住んでいること。

ウ 引き取り手のない死体を羅生門に棄てていくこと。 エ たくさんのからすが羅生門のまわりに集まって来ること。

オ 羅生門のまわりに誰も人がいなかったこと。

問五 傍線部 C とあるが、それはなぜか。本文中の語句を用いて、三十字程度で説明せよ。(10点) 思

問一	a	問二	1
	b		2
問三	c	問四	
	d		
問五			
			10
			20
			30

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に、エイキョウウした。A 申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何を办いても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばB どうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

C 雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあつという音を集めて来る。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

B どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとまはない。選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように捨てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になりほかにしかたがない。」ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きくさめをして、それから、大儀 とうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに、エンリヨなく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂へのない、人目にかかる恐れのない、一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思っただけからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰に下げた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履をはいた足を、そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。

問一 二重傍線部 a ｓ c を、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。(3点×3) 知

問二 傍線部 A とは、何時頃のことか。(6点) 知

問三 傍線部 B (二箇所) とあるが、「どうにもならない」のはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。(8点) 思

ア 下人の解雇は京の町全体の衰微のためであり、下人個人の力ではどうすることもできないから。

イ 京都の町は大きな町であり、下人がどうにかしようとしても動かすことは不可能なことだから。

ウ 主人から暇を出されたことよって、下人は暗澹たる気持ちでいっぱいになっているから。

エ 世間全体の環境が悪化したことは、一個人としての下人にとって責任は少ししかないから。

オ 何をやってもうまくいかないのは下人の性情に起因することであり、それは直しようがないから。

問四 傍線部 C の描写は、下人のどのような心理と重なるものとして描かれているか。最も適当なものを、次から選べ。(9点) 思

ア 正義感 イ 憂鬱 ウ 安堵 エ 罪悪感 オ 高揚

問五 傍線部 D とあるが、「人目にかかる」ことを恐れたのはなぜか。二十字以内で答えよ。(9点) 思

問六 本文からうかがえる下人の説明として最も適当なものを、次から選べ。(9点) 思

ア 若々しく元気で、やっと自由を得た喜びに未来への希望を持って明るく生きようとしている。

イ 他人のために役立ちたいと願いながら、何もできない現状を目のあたりにして絶望している。

ウ 今まで受け身の生き方してきたため、急な環境の変化についていくことができず戸惑っている。

エ 何をすることも面倒で、誰かがこの苦しい状況から自分自身を救ってくれることを強く願っている。

オ 若さをもてあまして、自分の力をどこにも発揮させてくれない世の中に理不尽さを感じている。

問一	a	問二	問三	問四
問五	b	c	問六	

10

20

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて、二げようとする行く手をふさいで、こう罵った。^A老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、初めから、わかっている。下人は I、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。 II、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、 III、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわな震わせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。これを見ると、下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで陰しく燃えていた。ゾウオの心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、 IV、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、^B安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。

「おれは検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようといううなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それをおれに話しさえすればいいのだ。」

すると、c老婆は、見開いていた目を、いつそう大きくして、じつとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように動かした。細い喉で、とがった喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前のゾウオが、冷ややかな侮蔑と一緒に、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

問一 二重傍線部 a、c を、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。(3点×3) 知

問二 空欄 I、IV に入る語句として最も適当なものを、それぞれ選べ。(4点×4) 思

ア いきなり イ きつと ウ やはり エ ちようど オ とうとう カ ただ

問三 傍線部 A とあるが、ここからは老婆のどのような心情がうかがえるか。説明せよ。(8点) 思

問四 傍線部 B とあるが、具体的には何に対する「得意」と「満足」か。説明せよ。(9点) 思

問五 傍線部 C とあるが、ここからは老婆のどのような心情がうかがえるか。最も適当なものを、次から選べ。(8点) 思

ア 検非違使の役人ではないと下人から確認できてほっとした気持ち。

イ 下人が絶対に自分をだましているに違いないと確信する気持ち。

ウ 自分を助けてくれた下人に対してありがたく感謝する気持ち。

エ 下人がなぜそこまでして自分を捕まえようとするのか疑う気持ち。

オ 下人の言うことが本当のことかどうかを探ろうとする気持ち。

問一	a	b
	c	
問二	I	III
	II	IV
	問三	
	問四	
問五		

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思ったのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、ヘイボンなのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一緒に、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方も通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、藁のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「Aなるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、何ぼう悪いことかもしれないぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそうぬ。わしは、この女のしたことが悪いとは思わぬぞよ。せねば、飢え死にするのじゃやて、しかたがなくなることである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にするじゃやて、しかたがなくなることじゃわいの。じゃやて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであらう。」

B老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇氣が生まれしてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上がって、この老婆をトらえた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「Dでは、おれが引剥ぎをしようと思ひまいな。おれもそうしなければ、飢え死にする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしこの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた。

問一 二重傍線部 a と c を、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。(3点×3) 知

問二 傍線部 A とあるが、老婆は下人がどのように考えていると受け取ったのか。最も適当なものを、次から選べ。(8点) 思

ア 老婆の行為を許せない悪いものだとして非難している。

イ 老婆の行動と自分は関係ないのでつまらなく思っている。

ウ 老婆が悪いことをするのはしかたがないと納得している。

エ 老婆が何をしているのかということに興味を持っている。

オ 老婆が下人に危害を加えるかもしれないので警戒している。

問三 傍線部 B について、老婆の考え方を大きく二点に分けてそれぞれ説明せよ。(7点×2) 思

問四 傍線部 C とは、どのような「勇氣」か。十字以内で答えよ。(9点) 思

問五 傍線部 D とあるが、これは老婆が女に対して言ったどのような言葉を踏まえているか。本文中から十字以内で抜き出せ。(10点) 思

問一	a	b	c	問二
問三				
問四				
問五				

次の文章は、芥川龍之介が『羅生門』執筆の際、素材とした『今昔物語集』（巻二十九第十八）の現代語訳である。これを読んで、後の問いに答えよ。

今となつては昔のことだが、摂津の国のあたりから、盗みを働くために京に上つてきた男が、日がまだ明るかつたために、羅城門の下に立ち隠れていた。朱雀大路の方は人の往来が激しいので、人通りが静まるまでと思つて、門の下に立つて待つていたところ、山城の方から大勢の人が来る音がしたため、「それに見られまい。」と思つて、門の二階にそつとよじ登り、中を見ると火がぼんやりともっている。

盗人は、「おかしい。」と思つて、連子窓からのぞいて見ると、若い女が死んで横たわっている。その枕元に火をともし、たいそう年老いた白髪の老婆が、その死人の枕元について、なんと死人の髪を乱暴に抜き取っているのがあつた。

盗人はこれを見ても理解できないので、「これはもしや鬼ではないか。」と恐ろしかつたが、「もしかすると死人の霊かもしれない、脅してみよう。」と思ひ、そつと戸を開け、刀を抜いて、「貴様は。」と言つて走り寄つた。老婆は、ものも手につかないほどうろたえて手を擦り合わせて狼狽するので、盗人は、「お前はどのような老婆で、何をしていたのだ。」と問うたところ、老婆は、「私の主人でいらつしやつた人がお亡くなりになったのだが、弔いをする人がいないので、このように置き申し上げているのです。その髪が背丈以上に長いので、それを抜き取つて鬢にしようと思つて抜くのです。お助けください。」と言つたので、盗人は、死人が着ている着物と、老婆が着ている着物と、抜き取つてあつた髪とを奪い取つて、二階から駆け下りて逃げ去つた。

さて、その門の二階には死人の骸骨がたくさんあつた。亡くなつた人で葬儀などができない死人を、この門の上に置いたのである。このことは、その盗人が人に語つたのを聞き継いで、こつ語り伝えられているということである。

問一 以下は『今昔物語集』（巻二十九第十八）と『羅生門』に関する教室での会話である。空欄Ⅰ・Ⅱに入れるのに最も適当なものを、それぞれ後から選べ。（25点×2）

教師——『今昔物語集』（巻二十九第十八）は『羅生門』のあらすじの素材となつた一話です。どのようなところに『羅生門』との違いがあるかを話し合つてみましょう。

生徒A——『羅生門』の「下人」は盗人になる決心がつかない人物として描かれていたけれど、『今昔物語集』では「盗みを働くために京に上つてきた男」とあり、最初から盗人であることが明らかにされているよね。

生徒B——たしかにそうだね。『今昔物語集』の「男」は盗みを働くことが目的で京にやってくるのだから、羅生門の上で「死人が着ている着物と、老婆が着ている着物と、抜き取つてあつた髪とを奪い取つて」という行為も盗人だったからこそと言えそうだね。

生徒C——でも、『羅生門』では「老婆の着物を剥ぎとつた」となつていて、死人の着物や髪の毛は奪つてはいないようだよ。これは『羅生門』が、盗人になる決心がつかない人物として「下人」を描いていたことと何か関係しているのかな？

教師——いずれもよい指摘ですね。まず、『羅生門』の「下人」は盗人になる決心がつかない人物として登場し、さまざまに逡巡しゅんじゆんしたあげく、最終的には「老婆」の着物を奪うという盗みを働きます。つまり、芥川龍之介は、盗人の「男」が「老婆」に対して盗みを働くという単純な構図の『今昔物語集』を、**Ⅰ**に改変したわけです。そして、その「下人」は「老婆」の着物だけを奪い、死人の着物や髪の毛には手を付けていません。ここからは、**Ⅱ**がうかがえます。つまり、「下人」が盗みを働くに至つた理由が、この描写からもうかがい知ることができる仕掛けになっているといえますね。

空欄Ⅰ

- ア 盗人が働く凶悪な犯罪を糾弾する物語
- イ 盗人になる決心をする人物の心理変化を追つた物語
- ウ 盗人となる人物の心理的暗部を描き出す物語
- エ 人間の誰もが持つ優柔不断な心理を戒める物語
- オ 人間の誰もが少なからず持つ邪悪な心理をあぶり出す物語

空欄Ⅱ

- ア 弔うこともされない死者の着物や髪の毛にはあえて手を付けないという、「下人」に残つたわずかばかりの良心
- イ 自分よりも圧倒的に力の劣る「老婆」を蹴倒し、その「老婆」の着物だけを奪い去るという、「下人」の凶暴性
- ウ 死人の着物や髪の毛という生活の手段にすることができないものには手を付けないという、合理主義的な「下人」の思考
- エ 死人の着物や髪の毛が生活の手段になることまで考えを及ぼす冷静な判断力を持たない、直情的な「下人」の性質
- オ 今の自分に必要となるものを考えたうえで「老婆」の着物だけを奪い去るという、「下人」の賢明な判断力

問一		
I		
II		

羅生門 基礎問題

- 問一 a 顧 b 刻限 c 眺 d けしき (3点×4)
- 問二 1 太陽が沈む 2 近寄らない (6点×2)
- 問三 人々は生活が苦しく、精神的にも荒廃していたということ。(10点)
- 問四 才 (6点)
- 問五 地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こったため。(31字) (10点)

羅生門 標準問題1

- 問一 a 影響 b たいぎ c 遠慮 (3点×3)
- 問二 午後四時過ぎ。(6点)
- 問三 ア (8点)
- 問四 イ (9点)
- 問五 人に危害を加えられるかもしれないから。(19字) (9点)
- 問六 ウ (9点)

羅生門 標準問題2

- 問一 a 揺 b きゆうかく c 未練 (3点×3)
- 問二 1 甘く見る 2 しばらくの間 (5点×2)
- 問三 雨の夜という人が出歩かない時間帯であり、死人ばかりで生きた人間がいるはずのない場所に存在する者だから。(12点)
- 問四 イ (11点)
- 問五 イ・力 (4点×2)

羅生門 発展問題1

- 問一 a 逃 b 憎悪 c しようじゆ (3点×3)
- 問二 I 才 II 工 III ア IV 力 (4点×4)
- 問三 自分の行為を罰せられると考え、早くこの場から逃げ出したいという気持ち。(8点)
- 問四 老婆を取り押さえ、屈服させたことに対する得意と満足。(9点)
- 問五 才 (8点)

羅生門 発展問題2

- 問一 a 平凡 b 捕 c けたお (3点×3)
- 問二 ア (8点)
- 問三 悪いことをした者に対して行う悪は許される。・飢え死にをしないために仕方なくする悪は許される。(7点×2)
- 問四 盗人になる勇氣。(8字) (9点)
- 問五 大目に見てくれる (8字) (10点)

羅生門 発展問題3

- 問一 I イ II 工 (25点×2)